

新版『資本論』第1巻講座：第7講義 相対的剰余価値とは何か？

協業、分業とマニファクチュア

主催：千葉県学習協会

日時：2022年12月18日（日）午後1時00分～5時00分

講師：萩原伸次郎（横浜国立大学名誉教授）

第4篇 相対的剰余価値の生産

第10章 相対的剰余価値の概念

「労働日の延長によって生産される剰余価値を、私は絶対的剰余価値と名づける。これにたいして、剰余価値が、必要労働時間の短縮およびそれに対する労働日の両構成部分の大きさの割合における変化から生じる場合、これを、私は相対的剰余価値と名づける」（新版③558頁、新書版550ページ、原文334ページ）。

労働日、すなわち1日の労働時間の大きさは変えずに、必要労働時間を短くし、剰余労働時間を長くすることによって労働力の価値に対する剰余価値の比率をたかめるのである。

a _____ b _____ c

a _____ b' _____ b _____ c

1 労働時間が0.5シリング（=6ペンス、というのは、1シリングは12ペンスだから）労働力の日価値が5シリングとすれば、必要労働時間は、10時間となる（ $\frac{5}{0.5}$ ）。12時間労働日だとすれば、剰余労働時間は2時間となる（12-10）。労働者に5シリングではなく、4シリング6ペンス、すなわち、6ペンス、1時間分ケチって支払えば、剰余労働は3時間になり、剰余価値の比率は増加する。しかしそれでは、賃金が労働力の価値以下に切り下げられ、再生産が不可能。労賃の現実の運動では起こりうるが、ここでは労働力は価値どおりに売買されるという前提なのでその論理では説明ができない。残るは、労働力の価値そのものが低下しなければ成り立たない。（新版③553～557頁、新書版545～548ページ、原文331～333ページ）

労働の生産力を増大させ、労働力の価値を低下させ、価値の再生産に必要な労働日部分を短縮するためには、資本、労働過程を技術的および社会的諸条件を、したがって生産方法そのものを変革しなければならない。（新版③558頁、新書版550ページ、原文334ページ）

労働力の価値を低下させるためには、労働者が日常的に消費する生活諸手段を生産する諸部門の生産力の増大が必要。労働者が消費しない部門の生産力が増大しても労働力の価値の低下にはならない。（新版③559頁、新書版551ページ、原文334ページ）

「個々の資本家が労働の生産力を増大させてたとえばシャツを安くする場合、彼の頭には、労働力の価値を引き下げようとして必要労働時間を“その分だけ”引き下げるという目的が、必ずしも浮かんでいるわけではない。しかし彼が究極においてこの結果に貢献する限りにおいてのみ、彼は一般的剰余価値率の増大に貢献するのである」(新版③560 頁、新書版 552 ページ、原文 335 ページ)

それでは、個別的資本家は、何を目的として労働の生産力の増大をはかるのでしょうか？
答え：商品の個別的価値の低下を実現し、社会的価値との差額を特別剰余価値として獲得するのが目的。具体例をあげよう。12 労働時間に 12 個の商品が生産され、商品 1 個の価値： $C+V+M=6+5+1=12$ ペンス=1 シリングだったが、24 個に生産を増やすことが出来たとしよう。商品 1 個の価値： $C+V+M=6+2.5+0.5=9$ ペンスとなる。社会的価値 12-個別的価値 9=特別剰余価値 3 ペンス。しかし、販売には市場の大きさが必要とされるので、販売価格が 10 となれば、個別価値との差額 1 ペンスが特別剰余価値となる。(新版③561~562 頁、新書版 553~554 ページ、原文 336 ページ)

「改良された生産方法を用いる資本家は、同業の他の資本家たちよりも、労働日のより大きい部分を剰余労働として取得する。彼は、資本が相対的剰余価値の生産にさいして一般的に行なうことを、個別的に行なうのである」(新版③563~4 頁、新書版 555 ページ、原文 337 ページ) 具体例をあげよう。上述の資本家は、1 個 10 ペンスの商品を 24 個売るから、総売上 240 ペンス=20 シリング ($240/12=20$) 総売上高は、 $C+V+M=12+5+3=20$ シリング、個数で表せば、 $C+V+M=14.4+6+3.6=24$ 個 必要労働と剰余労働の比は、5 対 1 から 5 対 3 になっている。12 時間労働の場合、5 対 1 の比率ですと、必要労働 10 時間に対し剰余労働 2 時間になるが、5 対 3 なので、必要労働 7.5 時間 ($12 \times \frac{5}{8} = 7.5$) に対し剰余労働 4.5 時間 ($12 \times \frac{3}{8} = 4.5$) となるのである。(新版③563 頁、新書版 555 ページ、原文 337 ページ)

「この新しい生産方法が普及し、それにもなって、より安く生産された諸商品の個別的価値と社会的価値との差が消滅するやいなや、右の特別剰余価値も消滅する」(新版③564 頁、新書版、556 ページ、原文 337 ページ) すなわち、販売価格が 9 ペンスになれば、個別的価値との差は、0 ペンス。

商品の価値×労働の生産力=一定
労働力の価値×労働の生産力=一定
相対的剰余価値/労働の生産力=一定

労働の生産力を上昇させることは、相対的剰余価値を同じ比率で上昇させるので、商品の価値を安くすることが、相対的剰余価値の上昇につながるのである。

したがって、労働の生産力の発展による労働の節約は、資本主義的生産においては、決

して労働日の短縮を目的としてはいない。(新版③567 頁、新書版、559 ページ、原文 339 ページ)

第 11 章 協業

協業の定義：「同じ生産過程において、あるいは、異なっているが連関している生産諸過程において、肩をならべ一緒にあって計画的に労働する多くの人々の労働の形態」(新版③575 頁、新書版、567 ページ、原文 344 ページ)。

協業は、歴史的にも概念的にも資本主義的生産の出発点をなしている。(新版③569 頁、新書版 561 ページ、原文 341 ページ)

協業は、労働の生産力にどのような影響を与えるのか。

- ・ 個別の労働は、社会的平均労働から多かれ少なかれ乖離しているので、協業の規模が大きくなれば、そこで働く労働者の労働は、社会的平均労働に近づく。(新版③570～572 頁、新書版、562～564 ページ、原文 342～343 ページ)
- ・ 共同使用によって生産諸手段を節約する(二重の観点からの考察：商品価値を低くし、労働力の価値を低下させる。前貸総資本への影響) 新版③573～575 頁、新書版、565～566 ページ、原文 343～344 ページ)
- ・ 集団力として発揮される生産力の創造(騎兵一個中隊の攻撃力 etc.) (新版③575 頁、新書版、567 ページ、原文、345 ページ)
- ・ 社会的接触による独自の興奮と競争心による個別的作業能力の向上(新版③576 頁、新書版、568 ページ、原文 345～6 頁)
- ・ 同種の労働を同時に行なうのであるが、連続的な場合(レンガを足場のしたから頂上まで運ぶ)、労働が結合される場合(ひとつの建築をさまざまな方面から取り組む) (新版③577～578 頁、新書版、569～70 ページ、原文、346 ページ)
- ・ 決定的な瞬間に多くの労働が僅かの時間の中に必要とされる場合(新版③579～580 頁、新書版、571 ページ、原文、347 ページ)
- ・ 労働の空間的作用部面を拡大し、生産の規模に比べて縮小させる(新版③581 頁、新書版、572 ページ、原文、348 ページ)

協業において、「労働者は、他の労働者たちとの計画的協力のなかで、彼の個人的諸制限を脱して、彼の類的能力を発揮させる」(新版③582 頁、新書版、573 ページ、原文、349 ページ)

協業の規模は、資本主義社会では、資本家の資本の大きさにかかっている(可変資本、不変資本)(新版③583～4 頁、新書版、574～5 ページ、原文 349～50 ページ)

協業を指揮する機能の必要：内容は二面的(社会的労働過程と資本の価値増殖過程)(新版③584～590 頁、新書版、575～80 ページ、原文、350～3 ページ)

労働過程における協業は、歴史貫通的に現れる。古代世界、中世、近代的植民地、資本主義的形態。(新版③590～592 頁、新書版、580～3 ページ、原文、353～355 ページ)

第12章 分業とマニュファクチュア

第1節 マニュファクチュアの二重の起源

「分業にもとづく協業は、マニュファクチュアにおいて、その典型的な姿態をつくり出す。それが支配的なのは、おおよそ 16 世紀中葉から 18 世紀最後の 3 分の 1 期にいたる本来のマニュファクチュア時代のあいだである」(新版③593 頁、新書版、585 ページ、原文 356 ページ)

分業は、協業の特殊な種類であり、協業のひとつの種類といいかえてもいい。独立手工業から産業革命によって成立した機械制大工業が成立するまでの、工場制手工業がマニュファクチュア。手工業が基盤であることが重要。

第 1 の起源：種類の違った自立的手工業が、同じ資本家の指揮のもとにひとつの製品をつくるように変形される。客馬車マニュファクチュア

第 2 の起源：同じ個別的手工業がさまざまな特殊的作業に分解する。針マニュファクチュア(新版③593～597 頁、新書版、585～589 ページ、原文、356～359 ページ)

第2節 部分労働者とその道具

終生ひとつの単純な作業を行なう労働者は、全系列の諸作業を順次行なう手工業者より、手短に作業を行なう。＜同一種類の労働の継続＞と＜彼の道具の完全さ＞によって労働の生産力は増加する。(新版③598～602 頁、新書版、590～594 ページ、原文、359～362 ページ)

第3節 マニュファクチュアの二つの基本的形態

—異種のマニュファクチュアと有機的マニュファクチュア

異種のマニュファクチュア：製品が、独立した部分諸生産物を単に機械的に組み合わせることによって形成される場合 時計マニュファクチュアは、個人的製品から無数の部分労働者から形成される製品へと転化

有機的マニュファクチュア：製品が、一系列の関連する諸過程および諸操作によって完成される場合 縫い針マニュファクチュア

労働の連続性、画一性、規則性、秩序が生まれる。一定の生産規模に対し、さまざまな部分労働者群のもっとも適当な比例数が経験的に確定される。

マニュファクチュアの結合が生じる場合がある。(新版③603～613 頁、新書版、595～605 ページ、原文、362～368 ページ)

マニュファクチュア時代における散在的な機械の使用→「全機構の連関により、部分労働者は機械の一部が持つ規則正しさを作業するように強制される」(新版③616 頁、新書

版、608 ページ、原文、370 ページ) マニュファクチュアは、諸労働の等級制を発展させる。熟練労働と不熟練労働に区分される。

第4節 マニュファクチュア内部の分業と社会内部の分業

社会内部の分業：生理学的な基礎の上で生じる分業、部族間その他の関係から生じる分業。「異なる諸家族・諸部族・諸共同体が接触する諸地点で、生産物交換が発生する」共同体間の接触は、それらをひとつの社会的総生産物の多かれ少なかれ相互に依存する諸部門に転化させる。(新版③620 頁、新書版、612 ページ、原文 372 ページ)

社会の内部における分業→マニュファクチュア的分業

マニュファクチュア的分業→社会の内部における分業

しかしこの二つは概念的に決定的に異なる。社会の内部における分業は、生産物の売買によって媒介されている。マニュファクチュア的分業は、資本家の指揮の下に計画的に運営される。社会の内部における分業は、商品の価値法則を通して特殊な商品種類の生産を決定するが(無政府性)、マニュファクチュア的分業は、資本家の権威の下に決定される(専制)。(新版③624～629 頁、新書版、616～619 ページ、原文、375～377 ページ)

インド的共同体における固定的分業関係(新版 629～631 頁、新書版 621～2 ページ、原文 378～379 ページ)

同職組合的組織におけるきわめて強く規制された分業関係(新版③632～3 頁、新書版、623～624 ページ、原文、380 ページ)

第5節 マニュファクチュアの資本主義的性格

「本来的マニュファクチュアは、以前の自立的労働者を資本の指揮と規律に従わせるのみでなく、なおそのうえに、労働者そのもののあいだの等級的編制をつくり出す。」「マニュファクチュア労働者は、その自然的性状から自立的な物をつくることができなくされており、もはや資本家の作業業への付属物として生産的活動を展開するに過ぎない。選ばれた民の額には、彼がエホバの所有物だということが書かれているのと同様に、分業はマニュファクチュア労働者に、彼が資本の所有物だということを示す刻印を押すのである。」(新版③634～635 頁、新書版、626 ページ、原文 381～2 ページ)

すなわち、自立的な農民または手工業者の知識、洞察、および意志は作業場全体にとって必要とされているに過ぎず、彼らは、マニュファクチュアの部分的労働者となっている。マニュファクチュアにおいては、全体労働者の、それゆえ資本の、社会的生産力の富裕化は、労働者の個別的生産諸力の貧弱化が条件。(新版③636～7 頁、新書版、627～8 ページ、原文 382～3 ページ)

A. スミスの人民大衆の萎縮を防ぐ国家による国民教育の推奨と G. ガルニエによる反対。

マニュファクチュアによる分業にもとづく協業は、同職組合的手工業と同じように伝統的形態を固守する。しかし、相対的剰余価値を生み出すためのひとつの特殊な方法であった。

マニュファクチュア時代に資本が打ち当たったさまざまな障害：熟練労働が依然として優勢であり、不熟練労働の数は限られた→労働者の反抗・不従順（新版③648～9頁、新書版、639～40ページ、原文 389～390ページ）

マニュファクチュアは、都市手工業と農村家内工業との広範な基礎の上に、経済的作品として聳え立っていた。マニュファクチュア自身の狭い技術的基盤は、ある一定の発展に達すると、それ自身によって作りだされた生産諸要素と矛盾するにいたった。すなわち、マニュファクチュア的分業自体から機械が生み出される。自らを否定するものを生み出すという歴史的事実。（新版③650頁、新書版、641ページ、原文、390ページ）